

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成29年度病虫害発生予察注意報第2号について

このことについて、病虫害発生予察注意報第2号を発表したので送付します。

8月2半旬調査の結果、トビイロウンカの発生量が平年に比べて多く、要防除水準を超えるほ場が2割程度みられます。

本年は6月25日と7月9～17日にかけての断続的な飛来が認められており、各飛来波の防除適期となる飛来後第2世代若・中齢幼虫期は、6月25日飛来で8月17日前後、7月9～17日の飛来で8月28日～9月8日頃と考えられます。

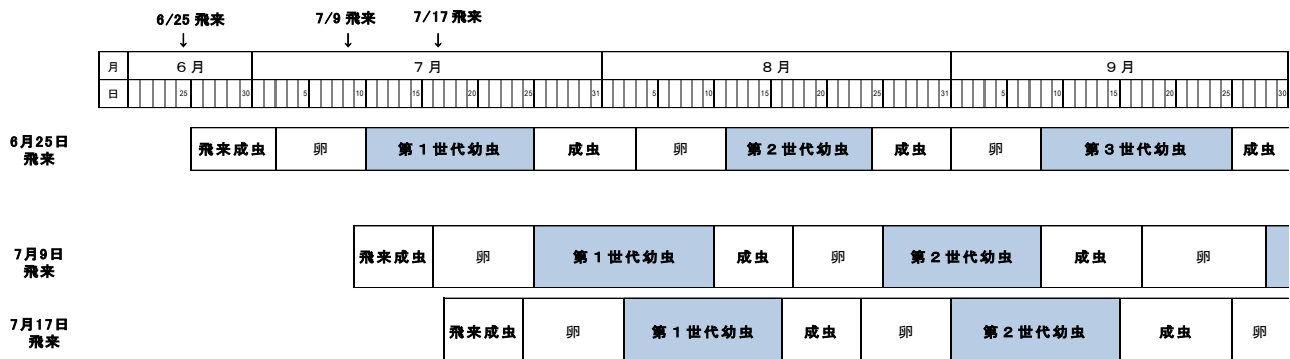
ほ場での発生状況を早急に確認し、適期防除の徹底について指導願います。

注意報第2号

- 1 対象作物：水稲
- 2 病虫害名：トビイロウンカ
- 3 発生地域：県下全域
- 4 発生量：平年・前年より多
- 5 注意報の根拠

(1) 飛来状況

予察灯とネットトラップ及び、JPP-NET（日本植物防疫協会運営）の「ウンカ飛来予測シミュレーションモデル」情報に基づくほ場調査より、6月25日と7月9～17日に飛来が確認された(図1)。



(注) (1) JPP-NETの有効積算温度計算シミュレーションを用いて算出。
 →発育零点12.0℃、発育上限温度28.5℃、発育停止温度33.0℃、有効積算温度(成虫期間100.0℃・卵期間109.4℃・幼虫期間189.4℃)

(2) 気温はアメダス太宰府を使用(8月8日まで実測値、以降は平年値)。

図1 飛来に基づくトビイロウンカの発生予想パターン図(平成29年8月9日作成)

(2) ほ場での発生状況：8月2半旬（8月2～8日）調査結果より

- ・県内44の定点ほ場における10株当たりの払い落とし成幼虫数は、平均1.5頭で平年（0.7頭）・前年（0.8頭）の約2倍と多かった（図2）。
- ・発生ほ場率は47.7%で平年（33.9%）より多く、前年（45.5%）並であった。
- ・飛来後第1世代の要防除水準である「中老齢幼虫の合計が100株当たり20頭（7月下旬～8月上旬）」を超えるほ場は15.9%であり、要防除水準の2倍以上の中老齢幼虫がみられるほ場も1割程度認められている。
- ・トビイロウンカの齢期構成は成虫並びに老齢幼虫が中心であるが、確認された雌成虫のうち、増殖力が高い短翅型雌の発生割合は100%であった（表1）。

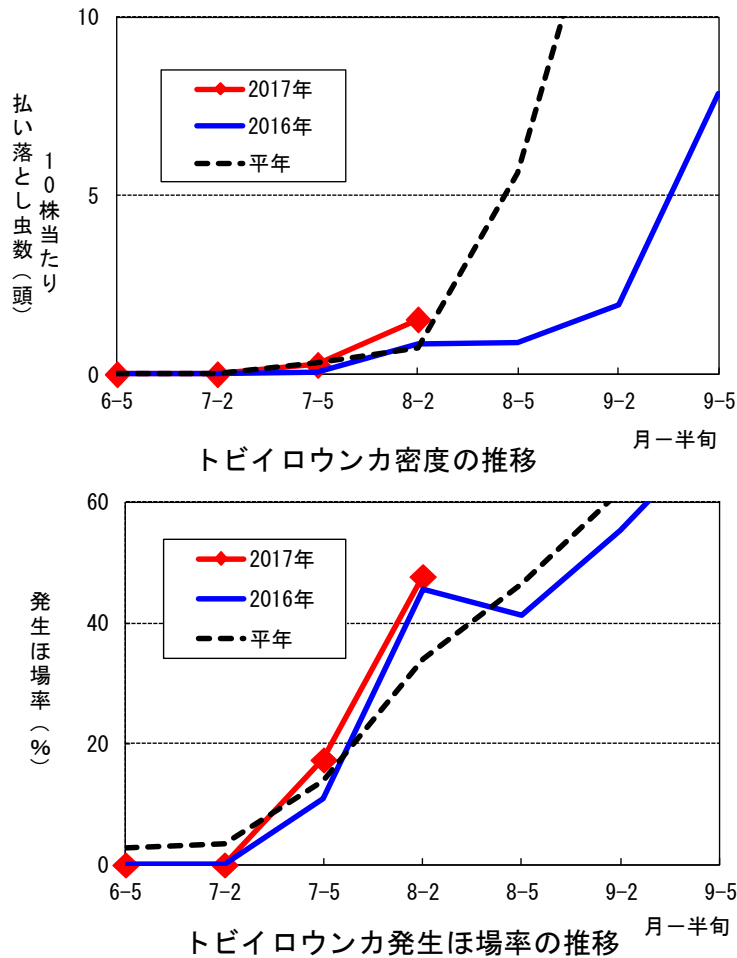


図2 トビイロウンカの発生密度と発生ほ場率の推移

表1 8月2半旬のトビイロウンカの齢期構成と短翅雌率（5月26日～6月25日移植水稻）

	雌成虫		雄成虫		成虫計	幼虫			幼虫計	成幼虫合計
	短翅	長翅	短翅	長翅		若齢	中齢	老齢		
比率(%)	16.0	0	10.7	14.2	40.8	7.1	13.6	38.5	59.2	100
雌成虫の短翅率	100	0	-							

(3) 今後の気象予報

福岡管区气象台が平成29年8月3日に発表した1か月予報では、多発生の条件になっている。

6 防除上注意すべき事項

(1) 本種の発生量は地域・ほ場・移植時期で大きな差があるため、ほ場をよく巡回し、要防除水準を超えたほ場では早急に防除を行う。

＜要防除水準＞トビイロウンカ：中老齢幼虫の合計数

・飛来後第2世代： 100頭/100株（8月中～下旬頃）

・飛来後第3世代：1,000頭/100株（9月）

(2) 防除適期は発生予想パターン図（図1）を参考にして、盆前後の齢期構成の調査から最適防除時期を決定する。

(3) 防除に当たっては薬剤が株元まで届くよう丁寧に散布し、散布後に防除効果を必ず確認する。

(4) 農薬の使用に当たっては、必ずラベルに記載された対象病害虫名・使用時期等を確認し、使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守する。

また、ミツバチ・魚介類等の周辺動植物及び環境に影響がないよう、飛散防止対策を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努める。

(5) 無人ヘリコプターによる防除を実施する場合は、気温が高くなる前の早朝に行う。

気温が高い時間帯に実施すると、薬剤の種類によってはイネの株元に到達する前に気化し、防除効果が著しく低下する場合がある。

(6) 使用する農薬については「平成28年度普通作物病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

(7) 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ

(<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。

